

# 「せせらぎ長者」の民話が物語る 「井落とし」の誕生

湖北を代表する民話の二つに「せせらぎ長者」があります。有名な民話ですが、その背景には湖北の水事情を象徴する出来事がありました。地元の歴史に詳しく、滋賀民俗学会会員で高月町社会教育委員・滋賀県文化財保護指導委員の高月町井口の高橋正泉さんにお話をうかがいました。

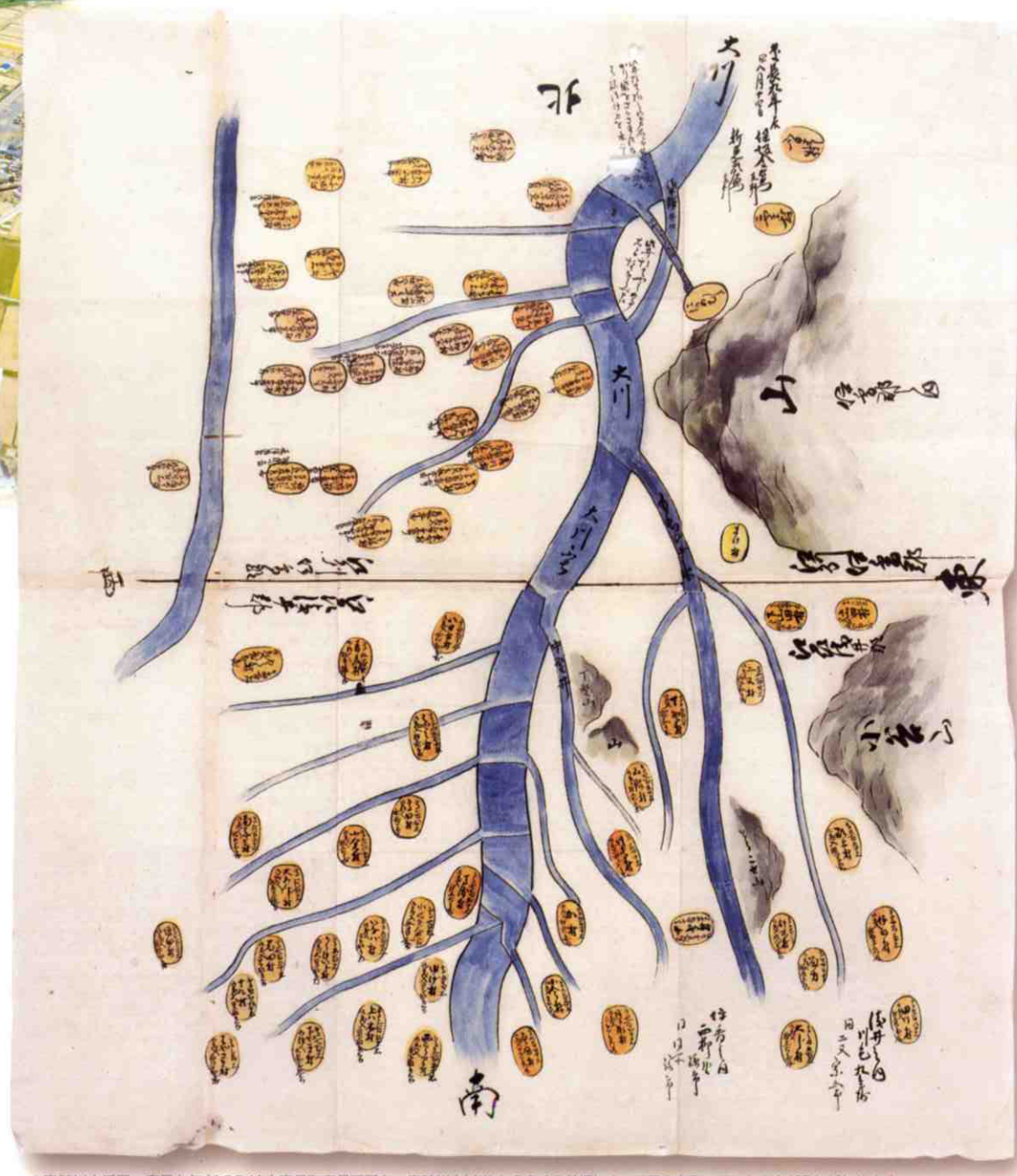
今から500年も前のこと。富水の庄に城を構え高時川の水を支配していた井口弾正は、村々の田圃がカラカラに乾き稲が今にも枯れてしまい、そんな様子に、「今年もまた米の取れない日照りがやって来るのか」と村役人を集め悩んでおりました。その上、自分が仕えている殿様・浅井久政（\*1）から難題を申し込まれて困り切っていました。隣の浅井郡にあった小谷城の周りの村々の田に水を引くために、高時川の一番上流、古橋のあたりに井（\*2）をたてさせてやってもいい、というものでした。もしそうだったとすると、今でも水が足りず充分に米がとれないのに、さらに井をたてて水をとりたててしまふことになるのです。その話を聞いた地元の農民は「わしらの田んぼどうしてくれるんだ」と大騒ぎをしました。そこで、弾正は殿様が承知するはずのない無理な注文を出してあきらめてもらおうとしました。「片目の馬千頭に、餅千駄、綾千駄、餅千駄（\*3）積んでもって来たら、たてさせましょう」と、弾正はできる筈がないことを確信しながら注文を出したのです。ところが、浅井郡中野村の「せせらぎ長者」が、ありったけのお金を全部投げ出して要求の品を届けてきたのです。「この勝負、おれの負けだ」。農民たちも「せせらぎ長者が村のために必死になつて整えた尊い贈り物だ。井をたてられても仕方ない」と納得しました。以来、この井のことを餅之井と呼び、昭和の初めまでその権利が守られました。

以上が民話「世々開長者」の概略です。このように、せせらぎ長者の努力により餅之井と高時川沿いの水路が繋がり、下流の小谷城の周りの田に水が引けるようになりました。

農民を納得させるための作話の可能性も「この民話はある程度史実に基づいたものですが、全てが史実かどうかには問題があります」と高橋さんは言います。

というのも、慶長6年（1601年）の古文書「御裁許之記」に「せせらぎ長者を遣わし、綿千反、綾千駄、餅千駄を送り水迄われ候事と聞伝え候えども、その三千駄の品も確かに見た人もなく、積み送りたるばかりにて一夜の間に雪の如く消え失せたる事と申し伝える」とあるように、せせらぎ長者が要求の品を届けていない旨が書いてあるからです。

「井口弾正してみれば、殿様に逆らうのははばかられるものの、簡単に要求をのんでしまえば農民たちの反発が予想されます。領民と権力者の間に立つて苦慮した結果こうしたエピソードを伝えて農民たちを納得させようとしたのではないのでしょうか。長者の子孫を重く用いたり、石碑を建てて顕彰したなどの事実が一切ないことからそう思われます。つまり、殿様の要求を受け入れたことを、合法化するために作ったエピソードだった可能性があるのでです。」（高橋さん）



▲高時川水系図 慶長九年（1604年）高月町高月区所有 高時川（大川）から多くの井堰によって用水を取っていたことがわかります。

昭和初期の「井落とし」の様子



▲井落としから引き上げる隊列 各村の総代が紋付羽織に陣笠姿で先頭に立ち、白装束白鉢巻の農民がそれに続きました。



▲井落とし 「井落とし」は朝落とし、昼落とし、暮落としと、必要な時に行う時落としがあり、また用具を一切用いず、総て素手で井を引き抜き水を下流に流しました。

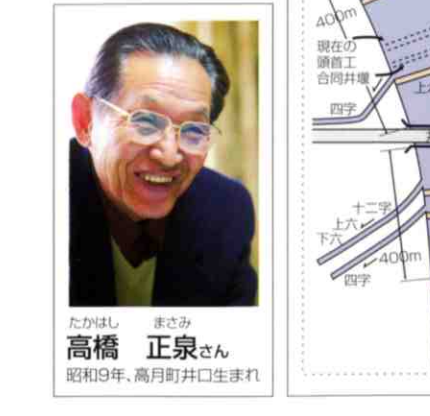
出典：湖北農業水利事業誌



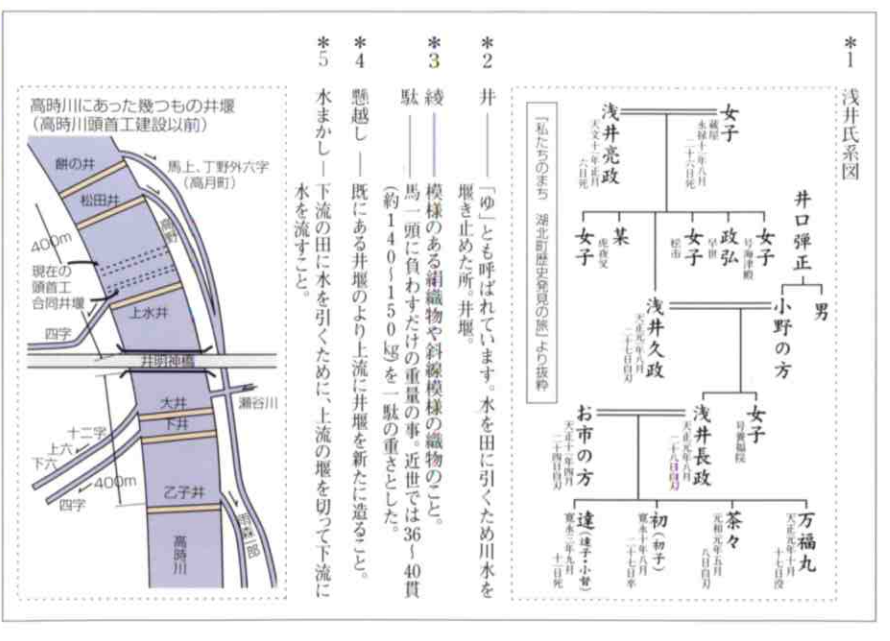
▲高時川頭首工 井明神橋付近には、下流の村々の井堰が6つ集中していました。昭和17年（1942年）に、それらを一つにまとめた合同井堰が完成し、現在の高時川頭首工は昭和43年（1968年）に完成しました。



▲世々開長者の顕彰碑 明治25年、虎姫町中野に建立されました。そこは長者の屋敷跡とも言われています。



たかばし まさみ 高橋 正泉さん 昭和9年、高月町井口生まれ



わが国水利史上希有の制度「井落とし」 「この民話が仮に史実ではなかったとしても、値打ちが下がるものではありません。それどころか、わが国の水利史上極めて貴重なものです。

下流の農民のために井を「懸越し（\*4）」させた代わりに、苦肉の策の妥協案として、この井は干ばつときは井落としをしてもよい（切ってもよい）「水まかし（\*5）」の権利が生まれたからです。全国的に見て懸越しの例は数多くありますが、水まかしの例は見当たらず、わが国でも珍しい制度です。この民話はそうした制度発祥の背景を表現しており、後年の「餅之井の井落とし」のルーツともなる貴重な存在だと思えます。

餅之井の井落としは、水まかしの行事であり、餅之井を落とし、川に水を流し餅之井の下流の井堰で取水し、中流の田に給水しました。井落としの際には白装束に身を固めて水杯を交わし、日吉神社の鐘が乱打される音を合図に出かけました。行きは急ぎ足ですが、戻るときは牛歩。隊列の姿が見えなくなると井を元に戻してよいとの定めがあり、少しでもたくさん水を下流に流したいと願ったからです。扇状地を流れる天井川・高時川下流の厳しい水事情を物語るエピソードです。

「湯水の如くに使つ」という言葉があるように、日本は水が豊かだとされてきました。でも、湖北では昔から「松の葉のしすくまで大事にせよ」と教えられたように、水をとても大切にしてきました。「せせらぎ長者」の民話は、そうした湖北の先人たちの思いが結晶したものだと言えるでしょう。この思いは今も変わりません。

しかし、「昭和10年ごろからブナ林の伐採が進んで山の保水性が失われ」（地元古老の話、地球規模の気候変化もあって、高時川の流量は減ってきています。降雨による濁水や瀬切れも増えました。耕地面積の増加に対応して、農業の形や水利利用合理化施策も実施されていますが、先人以上に水を大切にする必要に迫られているのです。